

# 児童文学研究—その(5)—

## 想像力の世界

高 山 浩 子

### 1. はじめに

児童文学が大人の文学と大きく違うところはいろいろあるが、とりわけ児童文学としてもっとも重要なことは、対象が子どもであるということである。そのことから、子どもの思考に対応する作品の妥当性が問題となる。子供の思考範囲は、幼いからという理由から大人よりはずっと狭いものだという先入観は、誤りのように思われる。子どもには子ども特有の想像豊かな世界がある。

一般に子どもは、確かに政治・経済・文化というような大人の世界の事情には、たいへん疎いと云わざるを得ない。そこで大人になる段階で、そうした必要で良質の知識を持たなければならないであろう。それらの知識をもたらすのは、いわゆる教育である。しかしながら、子どもはその点では外界からの影響は家庭とか学校とかいう、ごく限られた範囲でしかなく、したがって大人と比べて意識的には極めて純粋である。そして子どもは、与えられた知識を、あたかも砂に水が染み入るように吸収する。

このような時期であるから、子どもの精神活動は非常に活発であり、自分に関わるあらゆる方面に思考活動が展開する。ただし上述のように、それは子どもが関心を持つ分野に限られ、その範囲は決して広くはないことに留意することが必要である。子どもの思考対象は、大人のそれのように現実的な方面だけとは限らない。むしろ現実的な分野での知識や経験が少ないので、その方面の精神活動は苦手である。しかし非現実的な世界には、現実世界と同等以上の興味と関心があり、そこに多くの児童文学の存在理由がある。

現実の世界を「実」の世界と考え、想像上の童話の世界を「虚」の世界とすると説明しやすい。現実問題に頭を悩ます多くの大人たちには、子どもが闊歩する虚の世界は、現実的にはまったく利害関係もなくつまらないものであるし、興味も湧かないであろう。したがって、大人が積極的にアニメを見たり童話を読んだりする姿は、一部の人々を除いてあまり見かけない。大人の場合には、虚の世界に関心を持ってその世界に浸ることは、むしろ現実逃避として非難されるかも知れない。しかしながら虚の世界は、子どもにとっては夢があり一種の憧憬があるし、一部の大人にとっても幼い頃の郷愁がある。したがって虚の世界には、大人と子どもの接点があると思われる。

その虚の世界への架け橋が、想像力である。現実の世界ではあり得ないことや存在し得ないことが、あたかも実在するがごとくに描出されるのは、想像力の力によるのである。とくに児童は現実の世界に囚われないので、自由に想像力の世界、つまり虚の世界に羽ばたくことができる。したがって児童文学を創作する上でも、理解する上でも、鑑賞する上でも、想像力を駆使することが望まれる条件になる。

したがって、想像力豊かな児童を相手とする児童文学者は、当然のことながら豊かな想像力に恵まれことが望ましい。望ましいというのは、想像力によらない方法で子ども向けの話を描出する作

家もいるからである。つまり現実の現象や出来事を主題として、それを物語として横写する形で書かれることがあるからである。たとえば、家庭内や学校での出来事を、ほとんど写實的に描写した物語もある。しかしこういう方法で書かれたものは、児童文学ではむしろ少数派であり、多くの作家は想像力を駆使してストーリーを展開する。

## 2. 児童文学の根拠

大人にはすでに失われたかあるいは謳歌できない自由が、児童には豊かにあると考えられる。児童が有する自由とは、端的に表現すれば、精神的な自由であると言える。何ものにも束縛されない自由こそ、想像力の根拠であり、母である。精神的に拘束されない自由な精神状態から、独創的な思考が生まれる。そこでは想像力が作用して、思考が素晴らしい活動を展開し、時空間を自由に飛翔する。それはすべて、自由な精神活動の産物である。そして児童は、知らず知らずの間に、そのような自由を十分に使いこなしている。

そのような自由として、①未知ゆえの自由、②思考の自由、③空間的・時間的な自由、④社会的自由などを挙げるができる。そこで、これらの自由について考察してみたい。

まず、未知ゆえの自由とは、経験が極めて少ないためにあまり物事を知らないの、未知なものとの遭遇に好奇心をもって接する自由である。大人はともすれば過去の経験ゆえに、新しいことに挑戦するのに警戒したり躊躇したりすることがある。したがってどうしても思考態度に保守的などころが目立つが、その理由は、大人は経験してトラブルがないことが分かっていることに、一種の安堵感を持ったためである。逆に、失敗や恐怖を経験したことには、その記憶が蘇って行動にブレーキがかかる。

大人のそのような経験は、何を生じるか不明の未知のことに対して不安感を呼ぶものである場合が多いが、一方、子どもの方は未知なるものに興味をそそられる場合が多い。つまり、子どもは自分を取り巻くあらゆることに関心を示すが、これは目に映る世界を知ろうとする本能的な好奇心のなせる業である。このような子どもの好奇心は、見たり聞いたりすることに向けられるので、書物に対しても等しく向けられると考えられる。

多くの幼児は、母親や周囲の大人たちからいわゆる「お話」を聞かされると、興味津々であり、その話がどう展開されていくかを聞きたくなくて、語り手が一息入れようとする、「それから、それから」と言って続きを催促することが多い。気に入った絵本や童話を読める年頃の子どもは、ついと終わりまで夢中に読み通してしまう。このような子どもの好奇心は、善導すれば素晴らしい素質として定着する可能性がある。児童文学は、そうした児童の好奇心をそそるものでなければならない。

次に挙げられるのが、思考の自由である。大人は絶えず現実と直面し、現実に対応しているので、極めて現実的な思考をする。希望的なことや夢想的なことなどは、すべて夢物語として周囲の大人たちから相手にされないの、思考はどうしても現実重視となり、実現可能性のないものには立ち入らなくなる。しかし児童は、まず現実問題を深刻に考えるような環境にないことが多く、したがって思考はたいへん自由な場合が多いと思われる。

一般に児童は、このように現実という枠組から解放されていて、あるいは現実の厳しさを知らずにのびのびとしていて、経済的なことや現実的諸問題を考えることは少ない。それゆえ、思考には屈託がなく、自由に想像し空想して、自分の世界を描き出す。そこに大人には過去のものとなった、ナイーブで柔軟な思考が展開される。

空間的および時間的な自由は、想像力の原動力とも言えるもので、想像力が描き出す児童文学の世界の舞台をもたらす、その世界を活性化するものである。その舞台は幻想の世界となり、そこに

現実の世界からは遙かに遊離した虚の世界を現出する。童話や民話やおとぎ話など、児童文学の多くのジャンルで、時空間の自由が謳歌される。想像力はこうした四次元的な時空間から活動力を得て、豊かな空想に満ちた幻想的な世界を駆けめぐるのである。

日常とは相違する自由な空間に、作者の思考は飛翔して、現実世界とは無縁な想像の世界が描出される。このような自由空間は、空想的な児童文学の作品には必要な舞台である。宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』では、天空を走る機関車は天の川の周辺を走り、そして川の岸辺の様子が描かれるが、それは地上とはまったく異なる場所であり、作者の描く想像の景色である。そこには鳥が飛んではいても、その鳥の様子は地上では見られないものである。それは作者の頭脳から引き出された幻想的な空間であり、それはまさにこの作家によって虚の世界として構築されたものである。

しかし虚構の世界ではあっても、われわれ読者はこの物語を読んでいると、すでにその世界に入り込んでいることに気づく。そして主人公と共にその世界で登場人物たちを身近に感じつつ読みふけていくのである。そのように、実在しない空間という虚の世界であっても、読者は登場人物等と一緒にその世界で出来事を追体験していることになる。すべての拘束から切り離された自由な空間は、まさに多くの児童文学の温床であり、揺籃である。

さらに時間からの解放もまた、幻想的な文学には不可欠のものである。日常、時間に束縛されているわれわれには、通常、夢の中でしか時間を超越できない。しかしながら、文学はその点便利なもので、そのような脱時間の構図をもつ書物を読めば、いつでも時間を超えてその文学の世界に没入できる。時間は万人に等しく訪れるけれど、虚の世界では主観的で限定されない。こうした時間的自由こそ、多くの児童文学の活動の舞台となるものでもある。

このような脱時間の構図をもつ作品は数多いが、その一例を挙げればメーテル・リンクの『青い鳥』がある。この物語では夢の中での話として、幸福をもたらす青い鳥を探すことになる。夢は物語を四次元的に展開するのは便利なものであり、多くの作家がこれをいわばツールとして用いている。『青い鳥』では、問題の青い鳥は自分の家にいたのであるが、それは目が覚めてから分かることである。

チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』では、『青い鳥』と同様に夢がツールとして使われていて、その夢の中でスクールジーの過去・現在・未来がそれぞれ示される。物語の主人公は、時間軸の中を彷徨っているけれど、目覚めたときは現在である。これは児童文学と言うよりも、一般的なクリスマス物語だということもできるが、物語が時間の中を自由に動くということは、時間に縛られないで自由に行動しているという意味から超時間的な作品であることに変わりはない。

また、いつまでも子どもであるという、バリーの書いた『ピーター・パン』は、やはり超時間的構図をもつ作品といえよう。このように考えてみると、児童文学の多くの作品に、このような脱時間的構図を有するものが多いことに気づく。いずれにしても、時間を超えた作品は、想像力にエネルギーと活動の場を与える。こうして時間的な自由は、想像力に大きく貢献することになる。

社会的な自由も、想像力と大きく関わると言える。大人は社会的な地位や名誉を気にするがゆえに、あまり馬鹿げた思考はできなくなるが、子どもは社会から保護される立場であるが社会には大人という仲介者がいて、直接に社会と接してはいない。そこに社会からの自由がある。このような社会からの拘束のないことが、子どもの思考を自由にしている根拠のひとつとなっている。想像力は、そういう自由な状態にもっとも活発な活動の場を持つことになるので、子どもは盛んに想像を巡らすことになる。

このようなさまざまな自由が、子どもの精神活動を活性化し、想像力を豊かにしていると言える。

### 3. 想像力によって作り出される感情

想像力を駆使することで創作された物語からも、つまり虚の世界の話からも、その物語にあふれている特定の感情を、読者は感じることができる。このような虚構の上に作り出された感情も、その物語を読むことによって、実体験として感じ取ることができるのも文学の長所であろう。幼児期や児童期に感情が豊かに盛られた作品を読んだり聞いたりすることによって、子どもの感情も豊かになる。これこそが感情教育のもっとも効果的な方法であろう。

児童文学は読者たる児童に、このような豊かな感情を享受してもらうことを、目標のひとつとして持たなければならないし、それがなくて、たとえば教訓一点張りのものなどは、決して良い作品とは言えない。そして児童に与えられる感情は、純粹のものが望ましく、大人の社会でみられるような、不純な感情は好ましくない。たとえば、みぐるしい嫉妬や反社会的な嫌悪感などは、精神的に純粋な幼児などにはまったく好ましいものではない。したがって、児童に読ませたい作品を選ぶのは、あるいはその作品を作家として提供するの、まさに大人の責任である。そこに児童文学作品の質の問題が存在するし、われわれはそれを無視するわけにはいかないのである。暴力映画追放運動が先進諸国で問題とされているが、それは、以上のような理由から、児童には良くない効果を与える作品を大人が排除しようという試みであり、そのことは書物や雑誌にまで及んでいる。したがって児童文学の分野でも、当然避けて通れない問題でもあると思われる。

児童文学の作品から、児童にとって良質の感情を得ることが、大いに望まれる。そのためには、選択という大人の目を通して作品を選ばなければならない。つまりこの場合には、大人が一種のフィルターと同様の作用をすることになる。そうして、時間という長い道程を経て高い評価を維持しつつある作品が残ることになる。そのような作品は、一般に古典といわれているけれど、やはり感情的な面から言えば、それなりの良さがある作品であろう。

子どもが文学作品を読んでいて楽しいと感じることは、書物に興味を惹きつける意味において、もっとも重要な契機となる。楽しいという感情を引き起こす根源となるのは、やはり作品の面白さであるが、面白いと感じることは、一面において読んでいて歓喜の感情を覚えることにあると言える。したがって幸福感を感じさせる文学において、そのような喜びの感情を味わうことができる。

グリム童話の「白雪姫」は優しい王子の出現によって、ハッピー・エンドに終わる物語であり、読者に幸福な読後感を与えるものである。童話にはこのような幸福感を味わえるものが多いが、それは対象とする児童の感情を潤すには、幸福感がもっとも効果的で、もっとも穏やかに読者の感情に訴えるからである。この種の感情を読後に残す作品は、児童文学には多く見かける。それというのも児童が幸福感を多く経験することで、悪に汚染されることなく伸びやかに成長することを、周囲が期待するからであろう。

同じくグリムの書いた「シンデレラ」は、薄幸の一少女の掴む幸福を描いたものであり、女性の夢である幸福な結婚をテーマとしている。近頃の心理学で「シンデレラ症候群」といわれる概念は、俗に玉の輿に乗ると言われるような、棚からぼた餅的に幸運を期待する少女の心理状態を表現したものであるが、そのような幸福を掴む契機が、この作品で代表されるほど一般化している。

このように、メインテーマが幸福を掴むことにあるような作品は、だいたい児童も喜んで読むであろうし、親も積極的に薦める作品であると考えられる。したがって、児童文学の作品でもっとも無難なものと言えるであろう。

その一方で、悲哀を感じる作品も少なくない。それは人間の感情のうちで、喜びと対極にあるのが悲しみの感情であり、この両者の織りなす複雑な感情模様が、一般的には世の人の精神的な経験であり、人間模様である。このように悲哀感を味わうことで、児童は精神的に成長すると言える。

イギリスの女性作家ウィーダ (Oida, 1839-1908) の書いた『フランダースの犬』は、養祖父を失い友人の父の誤解から家を追い出される羽目になった少年ネロが、雪の降る日に教会で憧れのルーベンスの絵を見ながら、年老いた愛犬パトラッシュと飢えと寒さのために命を落とす話であり、読む人の涙を誘う物語である。ここで読者の感じる感情は悲哀であり、憐憫であり、同情である。こうした感情は人間にとってたいへん重要なものである。

またアンデルセンの「マッチ売りの少女」も、雪の中でマッチを売る少女が、寒さのために残りのマッチをともしながら、幻想のうちに優しくあった祖母を見つ凍死する話であり、これも上記と同様の悲哀感の残る複雑な感情を読者の心に呼び起こすものである。

こういう悲劇的結末をもつ物語は、これらの物語が書かれた19世紀の世相を反映して、これまでも富裕階級の憐憫の感情から社会的な貢献を引き出すねらいがあるとか、主人公たちのさらなる積極的な行動を期待するとか、いろいろな評価と批判を受けてきているが、やはり読後に残る感情の効果こそ、人間教育上もっとも重要なものであるように思われる。

歓喜と悲哀の感情は、人間の感情のうちでもっとも重要なものであり、古代ギリシャは演劇の盛んな時代であったが、もっとも基本的な演劇は喜劇と悲劇であり、とりわけ悲劇のウエイトが高かった。悲劇を見ることで当時の人々はカタルシスを感じながら、多分すっきりとした気持ちになったことであろう。児童文学の場合も、児童の心のうちに人間に対する関心と同情の気持ちを起こさせることは、感情の発達の著しいこの時期の子どもたちの教育上もっとも大きな効果をもつと考えられる。

これらの物語はすべて、虚構であり、想像力の産物である。したがって架空の事象からも豊かな感情を味わうことができることを意味している。想像力の偉大さは、無から有を生じるだけではなく、そこに感情豊かな世界を現出させることである。つまり想像力が、児童文学にとって大きな役割を果たすと言えよう。

#### 4. 感情移入と想像力

通常、日常の実際の出来事から喜怒哀楽の感情を生じるが、想像上の出来事からも同様の感情を引き起こすことが可能である。多くの児童は、その物語が作り事とは思っていても、読んでいくうちにストーリーの中の主人公の立場に同情して、悲哀や歓喜の感情をもつことになる。そこに、いわゆる感情移入の現象が起こるのである。そして幼い子どもほど、この種の感情移入が盛んである。それは映画やテレビなどの映像を対象とする場合の方が、視覚の効果と相俟って感情移入の効果は大きくなる。一方、大人の中には、これは虚構だと割り切っている人もいるし、異化効果を重視する見方もある。しかし子どもは一般に単純で素朴であるから物語に容易に没入するので、感情移入の効果はそれだけ大きくなると言える。

そのような感情を児童が抱くことは、それだけ豊かな感情教育がなされるということであり、近年叫ばれている情緒教育は、読書によるところ大である。人間関係が無味乾燥になりかけている現代の世の中で、潤いのある感情を涵養することは非常に重要なことである。他人の苦しみや痛みが分かるような子どもが育つことに、児童文学は貢献するところが大きい。そのためにも、幼いころから感情移入を充分に体験する必要があると思われる。したがって、このような訓練が文学を読むことによってなされると考えてまず差し支えないであろう。

感情移入の前提となることは、物語の主人公や登場する人々の感情を酌み取り、これを自分の体験として実感することである。つまり対象とする人物になりきって、その人の気持ちを想像することである。そのことから新たな精神的経験を獲得し、それによって自分の立場を認識することになる。物語の人物に悲哀感を感じたとき、いまの自分の幸福感を味わえるであろうし、物事に対する

価値観も若干変わるであろう。

感情移入のこのような効果は、現代の感情の風化した時代にはもっとも必要なものであろう。それは言うまでもなく、作者の想像力によって作り出されることが多いけれども、読書の想像力によって再構成され、高められていく。ときには、作者が考えた以上の効果を読者の側に生むことがあり得る。したがって児童期の読書は、人間形成に大きな役割を果たすと言っても過言ではない。

## 5. 想像力のある作品ない作品

想像力の豊かな作品が必ずしも大きな感銘を与えるとは限らない。たとえば、現実の出来事を写實的に模写した作品も、たまには読者に感銘を与えることもあるからである。しかしながら童話や児童詩などにおいては、やはり想像力の豊かな作品ほど児童に与える文学的・感情的効果は大きいように思われる。

宮沢賢治の童話群には、この種の想像豊かな作品が多い。『セロ弾きのゴーシュ』『注文の多い料理店』『風の又三郎』など、いずれも現実の話ではなく想像力によって作られた物語である。『セロ弾きのゴーシュ』では主人公の音楽家と動物たちの会話を中心であり、想像の世界の面白さが描き出される。『注文の多い料理店』では、山猫に騙される人間とそれを助けてくれる犬など、動物と人間の描写が面白い。『風の又三郎』では、都会からクラスに編入してきた男の子を中心に、現代風の話ではあるが、作者の想像力で如何にも幻想的な物語となっている。これらの童話において、賢治の描き出す世界では普通の動物や自然がたいへん生き生きとして描かれている。それというのも、作者の想像力が時空を超えて活発に活動するからである。賢治の童話から想像力を取ってしまったら、無味乾燥な作品になるであろう。

次に想像力の有無の点から児童詩を考察しよう。そこでまず、金子みずずの作品を一例として見てみよう。彼女の描き出す世界もまた、想像力に支えられて生き生きと描かれている。彼女は描出される動物や自然の事物の立場になりきって、情感豊かに詩を展開する。「雀のお宿」という詩がある。その中で彼女はこううたう。

雀のお宿に春が来て、  
お屋根の草も伸びました。

舌を切られた子雀は、  
ものの言へない子雀は、  
たもと重ねて、うつむいて、  
ほろりほろりと泣いています。<sup>1)</sup>

……

これはもちろん、おとぎ話の『舌切り雀』の話の続編である。金子みずずはここで、舌を切られた雀に心を寄せ、その雀の立場で書いている。一般に『舌切り雀』の雀は、悪いスズメだと思われている。したがってこのおとぎ話を読む読者は、罰として舌を切られたスズメには気持ちを寄せるところか、むしろいい気味だと思うことであろう。

しかしここで、みずずはまったく逆の立場をとっていることに気づく。こうした立場を変えて物事を見ることは、普通の人には思いつかないか、たいへん難しいことである。しかし彼女の想像力は、裏返ししてそれを可能にしているのである。そこにこの詩人の優しさがあがり、想像力の豊かさがある。

ひとつひとつの濱の石、  
みんなかわいい石だけど、  
濱辺の石は偉い石、  
皆して海を抱へてる。<sup>2)</sup>

これは「濱辺の石」という詩であるが、通常の思考パターンで言えば、海の石は海にかかえられているが、みずずの世界では石が海をかかえている。こうした思考の倒錯も、作者の側に豊かな想像力がなければできない

童謡においても、想像力の有無は詩作の評価に影響すると考えられる。日常のことをただリズムカルに詩にして視覚映像を現出するものと、想像力を駆使して別世界を垣間見せるものがある。次の二つの童謡を比べてみよう。

村の渡しの 船頭さんは  
今年六十の お爺さん  
年はとっても お船をこぐ時は  
元気いっぱい 櫓がしなる  
ソレギッチラギッチラ  
ギッチラコ<sup>3)</sup>

これは「船頭さん」という童謡である。村はずれの川の渡し場で、渡し船を漕いでいる老人を想起する。これが書かれたのは昭和16（1941）年であり、日本が第2次大戦突入した年でもある。したがって叙情的な詩歌は好まれなかったという事情は背景に存在するが、如何にも写実的であり、櫓を漕ぐ擬音がそれに輪をかけている。

次の童謡は大正15（1926）年に書かれたものである。

お山の お山の 細道は  
だれだれ通る だれ通る  
狐の 親子の 通るみち  
月夜に 兎の 通るみち<sup>4)</sup>

ほとんどの人は、夜の山道を通った経験はないであろう。この「お山の細道」の舞台の夜の山道は想像上の道であり、そこに行き交う狐も狸も、想像の産物である。つまりこの詩は想像力をもって鑑賞するしかないのである。大正デモクラシーの時代には、このほか「あわて床屋」「浜千鳥」（1919年）、「落ち葉のおどり」（1920年）、「ちんちん千鳥」「青い目の人形」「赤い靴」（1921年）、「月の砂漠」（1922年）など想像豊かなものが多く、おおらかな時代背景を感じさせる不朽の童謡がたくさん出現した。

例を挙げた上記二つの童謡は、タイプの違うものであり、見方によっては優劣をつけにくいと思われるであろうが、想像力豊かな作品は、それを味わう人にはほのぼのとした情緒を感じさせる。児童文学の領域では、そのような作品の方が多いし、親しみ深い。

## 6. むすび

これまでみてきたように、想像力は児童文学のもっとも強力な根拠であり、エネルギーである。想像力豊かな作品をたくさん読むことによって、あるいは感情を込めて鑑賞することによって、その作品から人間に必要な抒情性や心の豊かさを学び取ることができる。したがって、好奇心が旺盛で想像力豊かな児童期に、こうした作品に多く触れることは、単に文学的抒情性を育てるだけでなく、児童が将来大人になったときに望ましい、あるいは必要な、人間的感情を涵養するのに大いに役立つと思われる。

### 註

- 1) 金子みすず著 『美しい町』金子みすず全集1 東京 JULA出版局 1984年 22頁
- 2) 同 書 168頁
- 3) 『童謡』野ばら者社編集部編 東京 野ばら社 1994年 99頁
- 4) 同 書 187頁